
僕とメイドの騒々しい日常

ディルムッド

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕とメイドの騒々しい日常

【Nコード】

N1336Q

【作者名】

デイルムツド

【あらすじ】

この作品は一人の男の子と5人のメイドさんから成り立っています。

メイドさんとイチヤイチヤする。ただそれだけの話です。バトル展開もなく、悲しい過去も秘密ありません。

基本的にはメイド一人ずつにスポット当てて話を進めていきます。要するにギャルゲー方式で…げふんげふん。オムニバス方式で書いて行きます。

プロローグ（前書き）

人生初の小説執筆&投稿です。これから頑張って更新していきます。

プロローグ

「おはようございます。ご主人様。」

彼女の声が聞こえる。それは毎朝必ず聞こえる声。僕が一日の始まりに聞く大好きな声。

「もう、朝ですよ。今日も良い天気です」

僕はうつすらと目を開ける。まぶしい：

朝日が目に飛び込んでくる。

光を遮ろうと左手を顔の前にかざす。

「ご主人様、お目覚めになりましたか？」

僕は左手をどかし、彼女の方へ目を向ける。彼女は窓際に立ち、微笑みを浮かべながら僕に柔らかな視線を向けている。

ああ：彼女は綺麗だ。朝日を背にエプロンドレスを身に纏う彼女を見ながら改めて僕は思う。

彼女は僕のメイド・・・僕だけのメイド。

さら：軽く小首をかしげ その長い艶やかな黒髪を揺らし、

「どうか、されましたか？ご主人様」

不思議そうに尋ねる彼女に、僕は笑って答える。

「おはよう あずさ。今日も君は綺麗だなと思ってね。自分の幸せを噛みしめていたんだよ」

「ご主人様……」頬を染め うつむく彼女。

そんな彼女に僕は……

「ごっ主人様あゝゝ朝だあー」
おっきろーーーーーーーーーーーーーーーー」

「……そのバカを僕の視界から遠ざけてくれ。」苦々しく告げた。

これは 僕とメイド達の 騒々しくも 心温まる 物語……になるのか？

プロローグ（後書き）

短いですね。すみません。すぐ一話を投稿したいと思っています。

僕とメイドさんの朝（前書き）

第一話投稿です。朝の爽やか（？）な会話をお楽しみください。

僕とメイドさんの朝

「いやあ 今日の良い天気ですね♪」

「黙れ」

「今朝は元気っ娘風で起こして見ましたよ♪
嬉しいですか？」

「黙れ。そして消えろ。」

「明日はこういうキャラでいきましょう。
希望があればお聞きしますよ。ご主人様？」

「僕の希望は お前が僕の話聞いてくれる事だよ。あと、ご主人様？って言うな」

ふうー 彼女：水絵みえは腰に手を当てて
大きくため息をついた。

「全くワガママなご主人様ですね。そんな子に育てた覚えは・・・
ありますね・・・」

「僕にはないよ！お前何歳だよ！
とりあえず僕の両親に謝れ！」

「やれやれ、誰のお陰でそんな立派な突っ込みが出来るようになった
と思うてるんです」

「そっちの意味かよ！確かに反論は出来ないけどな！」

「いつか日本一の漫才コンビになろうと誓ったあの日を忘れたんですか？」

「それは反論させてもらう。そんな事を誓った覚えは無い」

「すぐ そんな事を言う。だから 若い男はいやなんだ
！」

「いや、お前 本当に何歳だよ？逆襲のシャアだろ、それ。」

「認めたくないものだな。自分自身の若さ故の過ちというものを…」

「そっちはまだ有名だけどな。しかし、お前ガンダム好きだな」

「私のガンダム！」

「0083か？確かにあれは凄いセリフだな。主人公でもないのにな。」

「お前を・・・殺す」

「ウイング？たしか一話のラストだよな？インパクトはあったな」

「ただの人間には興味はありません。宇宙人、未来人ー」

「待て。なんか違うぞ」

「もう・・・ゴールしてもいいよね…」

「それも違うぞ。」

名作だけどな。名作だけどな！
大事な事は二回言わないとな。

「問おう。貴方が私のマスターか？」

「それも名作だな。ついでに言っとくと
お前 メイドなんだから 僕がお前のマスターでもおかしくはない
んだけどな。」

「嘘だ！ ！」

「嘘じゃないだろ！ ちょうど良いセリフ見つけやがって。」

「えーと、次は・・・」

「待て。考えてみれば、なんで朝から僕たち
こんな事やってんだ。僕まだベッドのなかだぞ。」

「え？それは、ボクにベッドに來いって意味ですか？」

「違うよ！どう聞いたら そうなるんだよ！」

「エッチなのはいいけないと思います！」

「まだ 続いてたのかよ！ そして 僕が正しい筈なのに 何故か
負けた気分だよ。」

「ちなみにこのセリフは ウイング○ンのヒロインがよく言っていた『そういうことするの、良くないと思う』からひらめきを得たそうです。」

「それこそ 嘘だろ！　そしてお前は本当に古いアニメに詳しいな！　あと、伏せ字の位置がおかしいよ！」

「一息で三つも突っ込みを入れてくるとは…成長しましたね。」

「別に成長したくなかったけどな。というか、そろそろ本当に起きるよ。梓^{あずさ}やみんなも待ってるだろうし。」

「え？　あずさって…誰です？」

「何言ってるんだ　そこに…あれ、居ないな？」

「ご主人様…気を確かに。あずさんて何処にもいませんよ。」

「お前こそしっかりしろよ！　毎日顔あわせてるだろ！　ていうか、さつきまでこの部屋にいただろ！」

「あ…そう…ですよね。あずさは…います…よね」

「待て！　本気で引くな！　お前ら　普通に仲いいだろ！」

「大丈夫です、ご主人様。ボクはずっと

ご主人様の傍にいて、お世話いたしますから：グス」

「泣くなー。本気で心配するな！今日のお前 ちょっと怖いぞ。」

「さ、ご主人様。早く起きてください。いつまでベッドの中にいるつもりです。」

「相変わらず お前の切り返しは速いな。ついていけないよ。」

ようやく僕はベッドから抜け出し、大きく伸びをする。
やれやれ、今日も騒々しい一日になりそうだ…

僕とメイドさんの朝（後書き）

文章の9割が会話でしたね。

次話からはメイドの詳しいプロフィールを紹介していこうと思います。

3人目のメイド（前書き）

思い付くままに書いてみました。楽しんでいただければ幸いです。

3人目のメイド

さて、服を着替えるか…

それから 何か飲もう。朝から
叫び過ぎた。喉がいたい。

パジャマのボタンに手をかけ…

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「いや、なんで そんなじつと見てるんだ？」

「ご主人様の着替えを手伝う為ですが？」

さも当然というように、キョトンとした顔で
言いやがった。

軽く頭を傾けて…ちょっと可愛いじゃないか。悔しいから 絶対
に言わないけどな。

「いや、いいから先に食堂に行ってろよ。
大体いつも そんな事してないだろ。」

「反省したんですよ。今までの自分を振り返って。」

「それは良いことだけど…」

「これからはもっとご手淫様のお世話を…」

「待て！ 今、あり得ない噛みかたをしただろ！ お前は違うところを反省しろ！」

「失礼：噛みました。」

「違う。わざとだ…」

「ええ、わざとですが、何か問題でも？」

「開き直り！」

「仕方ないじゃないですか！ 良い返しがおもいつかなかったんですよ！」

「おまけに逆ギレ！」

何時になったらこの問答は終わるのだろう。

僕が不安に思い始めた時、

「あの、ご主人様 失礼します。」

開いたままのドアの方から 僕に呼び掛ける声が聞こえた。

「ああ、^{ほたる}蛍か。悪いな。呼びに来てくれたのか。」

「おや、あなたは我が家の最年少メイドにして、料理上手な 黒髪ポニーテールが似合っている大和撫子風美少女の蛍ちゃんじゃない

ですか。」

「何だ：その説明ゼリフは。」

「身長は154cm 体重は秘密♪ スリーサイズは上から 80・5…」

「み、水絵ちゃん！ 何言ってるんですか！」

蛍が慌てて、遮りながら部屋に飛び込んできた。

「止めてください！ ご主人様の前で。」

頬を真っ赤にして 涙目になりながら 僕の方をチラチラ見ながら 水絵に抗議している。

うむ。今日も蛍は可愛い。それに比べ、こいつは…

「何を言うのです。私なんて まだ 全く容姿についての描写がないですよ。」

蛍ちゃんには、むしろお礼を言われてもいいくらいです。」

だから メタ発言は止めろ。

「という訳で、ご主人様。」

「ん？」

水絵が蛍の抗議を無視して、僕に話しかけてきた。

「私を皆さんに紹介してください。」

「本当にお前には僕の言葉は届いてないんだな…」

流石に突っ込み疲れてきた…

「さあ このグラビアモデルばりのダイナマイトボディな私を紹介してください。」

「黙れ。ツルペタ。」

「そして、この輝く金髪ツインテール。」

「黒髪ストレート。前髪真っ直ぐじゃねえか。」

「小麦色に焼けた健康的な肌。」

「血管透けて見えるぞ。」

「分かりやすく言うと ハーフのモデルって感じですかね。」

「何処からどうみても日本人。150cmも無いくせにモデルなんて務まるか。」

「ニヤリ。」

「口に出すなよ。何笑ってんだ？」

「ありがとうございます。おかげで皆さんに私の事を知ってもらえました。」

「……………あ！ それが狙いか！」

「ありがとうございます。ご手淫様♪」

「頼む……………お願いだからそれは止めてくれ……」

ああ……何時になったら僕はこの部屋から出られるのだろう……

・
・
・

僕とメイドの騒々しい朝はまだ終わらない…

3人目のメイド（後書き）

えー次回は 他のメイドにも もう少し喋らせようと思います。

メイド達の沈黙（前書き）

他のメイドにもしゃべらせようと思いましたが、上手くいきませんでした。なお、作中の見解はあくまで、僕の個人的なものです。

メイド達の沈黙

「そう言えば、蛍ちゃん。貴女はどうしてこちらに？」

水絵が振り返って、蛍に尋ねる。

「ご主人様が食堂にいらっしやらないので、お迎えにきたんです。あの…梓さんが水絵ちゃんとご主人様がお話しているからって…」

ああ・・・自分じゃ止められないと思って、蛍をよこしたのか。
全く水絵^{コイツ}は、皆に迷惑かけてるな。

「今、失礼な事を考えませんでしたか？ ログイン様？」

「誰だよ、それ。どうせ、良い切り返しも思い付いてないんだろ。普通に呼べよ。」

「失礼しました。ロリコン様。」

こいつは……

「ペドフィリア様とお呼びした方がよろしかったですか？」

「原形が微塵も無いだろ！ 人を犯罪者のように呼ぶな！」

「そう言えば、ご主人様。ロリとペドの違いってご存知ですか？」

あつさり普通に呼びやがって……

「えーと、ロリとペドの違い？」

確かロリコンが和製英語で、ペドが英語だっけ？」

何だかんだで、付き合い良いなあ 僕も…

「ええ、その通りです。捕捉すると、ペドという言葉は幼児く小児を差し、ペドフィリアといえは小児性愛を差すのですけどね。」

「へえ。」

「他にも、ロリは少女だけを対象とし、ペドは男女問わず 対象になること。あと、これは諸説ありますが、ロリは小学校高学年く中学生くらいまで。ペドは幼児く小学生が対象という違いもあります。」

「ほうほう。」

「又、ロリはあくまでも、精神的つながりを求めるものであり、Yes ロリータ No タッチ の心得を守れないものは、ロリコンとは呼べないという意見もあるそうです。」

「なるほど。」

勉強になるなあ。

「つまりですね、ご主人様。」

「ん？」

何だ？ 珍しく真剣な顔だが。

「ご主人様をお呼びする際は、ロリコン様とお呼びしましょうか？
ペドフィリア様とお呼びしましょうか？」

「両方ダメだよ！」

やっぱりこんなオチか！

分かってたけどな！

読めてたけどな！

「年齢的にはペドとは呼べませんし、かといって、精神的つながり
……ハッ（笑）」

「笑うなよ！ 誰にも何もした事無いだろ！」

「梓さんって、最近また胸が大きくなったみたいですよ。」

「えっ、マジで？」

「着替えの時、聞きました。ブラジャーがまたきつくなってきたっ
て。」

「ブラジャーが……」

「梓さんの胸って凄いですよ。つきたてのお餅みたいに、真っ白で
おまけに凄く柔らかいし。」

「柔らかい…って、お前 触ったのか！」

僕もまだだというのに！

「女の子同士ですからね。お風呂に一緒に入った時に。」

な？？？ ふ、風呂？？？？

「風呂だど~~~~~!!!!!!」

魂の絶叫だった。

「そんな驚く事ですか？ 一つ屋根の下に住んでるんですよ。お風呂くらい一緒に入りますよ。」

い、一緒に風呂……

安西先生… 僕も入りたいです……

「いや、そんな床に手を着いて落ち込まなくても………」

ハッ、そうだ！ どうしても これは、これだけは確認しなくては！

「あ、あの ご主人様」

ガバッ

床から起き上がり、水絵の両肩を掴む。

「頼む！ 水絵！ これだけは教えてくれ！」

「は、はい。」

うむ、素直だ。いつも こうならコイツも…

おっと そんなことより

「み、水絵。あ、あのな。」

「お、落ち着いてください。ご主人様。目が血走って 何か本当に
はんざ…」

「僕は落ち着いているさ。人生の中で今ほど
落ち着いたことはない。」

「と、とてもそうは見えないんですが…」

「そんなことよりもだ、一つ確認したいのだが、」

「は、はい。」

ゴクッ

「その おっぱいって お風呂に浮くって本当か？」

「……」

「……………」

「う、浮いてました。確かに。」

「間違い…ないか？」

「間違い…ありません。」

ヒヤッホ~~~~~

すばらしい!!

伝説は本当だったんだ！

ラピュタは本当にあったんだ。

これで我が軍はあと十年は戦える…

神様 ありがとう!!!!!!

VIVA オッパイ!!!!!!!!!!

「あ、あのご主人様。」

ん、水絵が呼んでるな。

ああ、いつもは憎たらしいコイツが今は福音を告げる天使に思える。

「ん、どうした♪」

「あの〜」

チョンチョン

部屋の隅を指差す。

何だ？ 別にこの部屋には僕とお前しか…

「……………」

「……………」

「……………」

「あの、蛍さん」

何故か敬語になる僕

「は、はい。ご主人様」

「まず質問から切り出す弱気で臆病な僕を
許して欲しいんだけど、み、見ていらっしやられましたか？」

ああ…自分でも何を言っているのか

「は、はい。」

「き、聞こえてもいらっしやられちゃったりしたのかな？」

「は、はい。その…同じ部屋に居りましたので…」

申し訳なさそうに答える蛍。

「そ、そうだね。」

「は、はい。」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

ち、沈黙が痛い。

安西先生… 消えて…しまいたいです。

僕の騒々し…いや、沈黙の朝は続いてゆく……

メイド達の沈黙（後書き）

次回こそ、必ず蛍にしゃべらせようと思います。更新は本日中になんとか。

メイドさん 頑張る(前書き)

ようやく 蛍のターンです。ちょっと作品の雰囲気も変わります。

メイドさん 頑張る

「……」

「……」

「……」

(い、いかん。このままでは)

蛍をチラリと見る。

「……」

顔中真っ赤だ。俯いて目を合わせようとしなない。

うう…気まずい。くっ、よりもよって蛍の目の前ではしゃぐとは…

マズイ、本気でマズイ。蛍はこの水絵と違って 真面目で純真だからな。

水絵、こうなったらお前が頼りだ。何とかしてくれ。

チラチラと救いを求める視線を送る。

すると、

グッ！ 親指を立ててくる。

うむ！ やはり、水絵こいづは頼りになる。僕をおちよくる困った奴だが、
こういう非常事態には…

「あ！しまった」

？ なんだ？ 左手の手首を見たりして…時計なんてはめてない
だろうに…

「バイトの時間だ！」

「は？」

え、それって、もしかして…

ダッ！ 振り向いてそのまま部屋を出ていった。

「……」

「……………」

部屋に残ったのは、僕と蛍の二人だけ。

え、江頭2…50

かああああああああああああああああああああああ

あ、あいつ逃げやがった！

う、裏切ったな。

僕の気持ちを裏切ったな！

なんて、神話になった少年の真似をしてる場合じゃない。

落ち着かなくては。こういう時は…そうだ！ 素数を数え……

「あ、あのご主人様」

素数は孤独なすう…

「ご主人様！」

「はい」

慌てて意識を正面に向ける。

蛍が顔を真っ赤にしたまま、僕のことをじっと見ている。

「ご主人様、その…き、気になさらないでください。」

僕のことを見上げたまま、言葉を紡ぎ出す。

「男の人って、そういうことに興味を持つものなんですよね」

「……」

「で、ですから」

「蛍」

「は、はい」

「そこに座りなさい。」

「え、え？」

頭に疑問符を浮かべつつ、素直に正座する蛭。

僕もその正面に正座する。

「ゴホン」

「……」

「えー 男というものは」

ジー。蛭が僕をじっと見つめている。

「えー」

ジー。見つめている。

「……」

ジー。見つめ……

「申し訳ありません」

土下座していた。

「え、え？」

「生まれてどうもすいません」

人生初の土下座だった。

「あ、頭を上げてください。ご主人様。そんな事なさないでください！」

「いや、しかし」

「ご主人様はちっとも悪くないです。だから、そんな事…」

ムッ、いかん。涙混じりになってきた。本気で泣かれたら、いよいよどうしようもないからな。

「ああ、蛍。重ねて悪いな。困らせるつもりはなかったんだ」

「あ、はい」

うむ、どうやら落ち着いたようだ。

「ああ、まあ、僕が言いたい事はだ」

強引にまともに入る僕。

「はい」

「こんなご主人様だけど、これからもよろしく頼むよ。」

と言いながら、蛍の頭を撫でる。

「あ…」

蛍がそっと俯く。

僕は頭を撫で続ける。

「……」

蛍は黙ったまま、大人しく撫でられている。

うん、やっぱり蛍は可愛いな。

このまま、ずっとこうしていたいけど、そうもいかない。

僕は蛍の頭からそっと手を離す。

すると、

そっと、蛍が僕の手を両手で包むように…

「蛍？」

蛍は僕の手を包んだまま、自分の胸の前まで持っていく、

「あの、小さい胸は駄目ですか？」

僕の騒々しい（胸の中が）朝は続く………

メイドさん 頑張る(後書き)

甘々な話は難しい…次回、どうするかは…まだ、決めてません。しかし、いつになったら部屋から出られるんでしょうね。

メイドさん 更に頑張る(前書き)

短くてどうもすみません。

メイドさん 更に頑張る

「あの、小さい胸は駄目ですか」

い、今起きた事をありのまま話すぜ。僕は朝起きたら、バカメイドと散々漫才染みた会話をしていた後、ソイツに騙されて（ここ重要）美少女メイドの前で恥を欠かされたんだ。

何とか話をまとめて、彼女の髪を撫でていたら、彼女が僕の手を握って、小さい胸は駄目ですか、と聞いてきたんだ。何を言っているのか、わからないと思うがって…………

いや、本当に何だ この状況。

何処からか、スタンド攻撃を受けてるんだとしたら、一体どんなスタンド使いだ ソイツ。僕はソイツに抗議すれば良いのか、お礼を言えば良いのか、どうしたものだろう。教えてください、西尾○新先生。ん？ 荒木飛○彦先生に聞いた方がいいかな？

「あ、あのご主人様」

蛭の声でハッと我に返る。僕のすぐ前には僕の手を握ったまま、じっと見上げてくる蛭がいる。

「私 梓さんや、しいなさんみたいにスタイル良くないし」

蛭が僕の目をじっと見つめたまま、囁くように、でもハッキリと告げてくる。

「水絵ちゃんみたいに楽しい会話も出来ないし、」

いや、アイツみたいにだけはならなくてくれ：

「お料理くらいしか取り柄がないけど」

そこで一度言葉を切って、握ったままの手に力を込める。

蛍の小さな手から、熱が伝わる。

鼓動が高まる。

体の中を流れる血管の音まで聞こえる気がする。

耳のすぐ横を川が流れているかのようだ。

僕の手…汗ばんでないかな。

今更ながらにそんな事を気にする。

「私　ご主人様にお仕えしててもいいですか？」

蛍…そんなの…そんなこと……

「あ…」

空いていた左手で蛍を抱き寄せる。

「いいに決まってるだろ」

蛍の耳許で囁く。

「……」

「蛍は僕のメイドなんだから」

「は…」

「ずっと一緒だよ」

「はい…ずっとお仕えます」

蛍の髪…いい匂いがする。

鼓動が伝わってくる……

蛍の鼓動…

僕の鼓動も伝わってるのかな……

僕と、蛍の、二人の朝は続く……

メイドさん 更に頑張る (後書き)

名前がでてきたメイドですが、次回又は次々回に登場予定です。屋敷一の巨乳です。

メイドさんは見ていた（前書き）

前話より更に短いです。

メイドさんは見ていた

「蛍」

「はい」

「手を放してくれないか」

「え…」

「このままじゃ蛍をしつかり抱き締められない」

「あ…」

「もっと蛍を、感じたい」

「…はい」

そつと蛍の体を放す。

蛍が名残惜しそうに、握っていた手を離す。

ずっと握られていた手…風を感じる、冷たい。

その冷たさを振り払うように、蛍をもう一度抱き締める。

「はう…」

「ごめん。痛かった？」

「いえ：大丈夫です」

気持ちが溢れ出しそうだ。

右手を蛍の頭に乗せ、僕の胸に押しつける。

左手は彼女の腰にまわす 細いな。

ぐっと力を込める。

さっきよりも蛍を感じる。感じる事ができる。

うれしい。

「ご主人様」

蛍が僕の胸の中で囁く。

「なに？」

彼女の耳許に返事をかえす。

「私 幸せです」

蛍も、同じ気持ちなんだな。

僕は更に力を込め：

ガタッ！

「！」

「！」

物音に慌てて、ドアの方を見る。

ドアは開いていて、そこからは…

毎日見ている顔が三つ 縦に並んでいた。

1つは水絵だ。

あと2つは…しいなと友里、か。

見られて、たんだよな。

僕と蛭の…

バツ！

蛭が慌てて僕から離れる。

そのまま、僕とドアの三人に背を向けて、俯いている。

僕はゆっくりと三人の方を見る。

僕とメイドたちの騒々しい朝は、どうやらこれからが本番のようだ。

メイドさんは見ていた（後書き）

二人、新しく出しました。次回更新は、時間をかけて、もう少し長くします。

メイドさん 更にふたり 入られまーす (前書き)

取り敢えず、メイドさんは5人で廻していこうかと。

メイドさん 更にふたり 入られまーす

人間はショックが大きいと逆に冷静になるという。

が、それは嘘だ。少なくとも僕にとっては。

「な、何やってんだあ！ お前ら！」

今朝一番の大声が出た。

「「「……………」」」

さすがに三人とも声もないようだ。

「取り敢えず部屋に入ってこい」

三人がおずおずと部屋に入ってくる。

全く何を考えてるんだか。

「あ、あのご主人様 私、その、し、失礼します」

蛭が僕の顔を見ないまま、部屋を出ていく。

無理もない、後でフォローしなくては。

「あのご主人様…」

ん、水絵か。

フム、さすがに今回はこの馬鹿も反省してるか。

なんたって謝るか、聞いてやるか。

「エッチなのはいけないと思います!」

「やかましいわ!」

人差し指立てて、ポーズまで決めやがって。

「ご主人様」

今度はしいなか。

フム、彼女は最年長だしな、キチンと謝ってくれるか。

「そういうの、良くないと思うの」

「お前もか!」

「そういう事しないのが、貴方と私の最優先事項よ」

「ダブルでボケるな!」

ウチのメイドは古いアニメばっかみてんのか。

「ご主人」

「友里か…」

さあ、今度はどのアニメキャラだ。覚悟は出来てるぞ。ドンとこい。

「ご主人の私室で、何をするのも自由だが、朝からメイドを引っ張り込まなくてもいいんじゃないか」

「普通だ！」

何だ、この敗北感…

いや、マトモなメイドが居てくれるのは良い事だ。

そうだ、そう思おう。

そう思わねば、やってられない。

「ご主人様　大丈夫ですか」

「しいなか、大丈夫、僕は大丈夫だ」

そう、僕は強い。これしきのこと…

「しいなさん、ご主人様はオッパイ星人ですからオッパイを触らせてあげたら元気出ますよ」

「テメエは永遠に黙れ！」

水絵は、^{コイツ}何で此処に居るんだ？

何故、僕はコイツを雇っているのだろう。

「え、だって、しいなさんはこの屋敷一の巨乳ですよ」

「何が、だってだ！　もう乗るか！」

「あらあら　ご主人様　エッチですねえ」

「しいな！　お前も乗らなくて良い！」

「ご主人、私室で何をするのも自由だが…」

「友里、お願いだからソツとしておいてくれ」

さすがに疲れてきた：

「ム、ご主人様　お疲れですか」

9割　お前のせいだ。

「ご主人、水でも飲むといい。」

友里が水差しからグラスに水を注ぐ。

ああ、これだけのことがとてもありがたい。

「ご主人様　お疲れなら、膝枕でもしましょうか」

「ああ、しいな　気持ちは嬉しいけど」

いや、朝起きたばかりなんだけどな。

「そうですよ、しいなさん。
ご主人様は乳枕の方が…」

「良し判った。お前は僕の敵だ」

このバカを葬らない限り、
僕に安息の日は訪れない。

「ご主人」

友里か、グラスを差し出してきた。

「ありがとう 助かるよ」

グラスの水を飲み干す。

美味い。

一杯の水がこんなに美味いとは。

「ごちそうさま 友里」

「どういたしましたで、ご主人」

友里は基本無表情だが、
よく気配り出来るメイドだ。

「ところで、ご主人」

「ん、何だ？」

友里が質問？

珍しいな、なんだろう。

「大きい胸以外は興味なしか。
ちなみに、私はDカップなんだが」

「友里、お前もか」

ドーンと、床に両手をついて落ち込む。

「友里ちゃん、大丈夫ですよ

ご主人様はオッパイの大きさにはこだわりません」

「ム、そうなのか」

「あらあら」

「ええ、オッパイは大きさよりも形の良さ
さらに言えば一番大事なのは味だと言っていました」

「むう、形には自信あるが
あ、味か」

「あらあら」

姦ましいメイドたちの会話を聞きながら、
僕は心から思った。

誰か、誰か助けてください。

それだけが、僕の願いです。

僕とメイドたちの騒々しい朝を……早く、終わらせたい。

メイドさん 更にふたり 入られまーす（後書き）

お読みいただきありがとうございます。

今後も、更新に間が空くと思いますが、

（別作品の連載が……）

何とか週一本を目標に頑張っていきます

全国のメイド好きの為に（笑）

なにげに再登場（でも出番少ない）のメイドさん（前書き）

彼がようやく部屋を出ます。

なにげに再登場（でも出番少ない）のメイドさん

「つまり、ご主人様はレベルの高いへんた…」

「あらあら」

「むう、これは認識を改めんと」

僕の部屋ではメイドたちが危険な会話を続けている。

いかん。このままではいかん。

強引でも何でもこの流れを断ち切らねば。

「水絵！」

ビク

珍しく僕が大きな声を出したせいか、
水絵が慌てて姿勢を正して僕に向き直る。

「しいな！ 友里！」

サッ

二人ともさすがに空気を読んだか、すぐに姿勢を正す。

「……………」

「「……………」」

三人をゆっくりと見る。

ふむ、漸く落ち着いたか。

「僕は着替えてから食堂へ向かう。
お前達は先に食堂へ行っている」

「あ、あの ご主人様…」

水絵が話し掛けてくる、が。

「同じ命令は二度ださない」

「……………」

水絵が申し訳なさそうに下を向く。

一瞬、可哀想に思ったがここでこえを掛けちゃいけない。

「了解した。ご主人。食堂でお待ちしている」

友里が反応してきた。

そちらに向かって軽く頷くと、すぐに彼女は振り向いて部屋を出ていった。

「では、失礼いたしますねー ご主人様ー」

しいなが後に続く。

「さ、水絵ちゃん いきましょ」

しいなが水絵の肩を抱き、部屋を出ていこうとする。

水絵がこちらを振り返り、何か言いたそうだが、
結局何も言わず、頭を下げ部屋を出ていった。

しいなが部屋を出ていき、やっと一人になった。

はああああああ

大きく息を吐き出す。

ドサッ

思わずベッドに倒れ込む。

「どうなってるんだ、今朝は…」

何だか、高々数十分の出来事が二週間以上に感じられる。

冗談抜きでどこからか、スタンド攻撃でも受けてるんじゃないか。

世の中には朝家をでるのに、小説にして80ページ程の時間をかける男子高校生もいるそうだが、今後は僕も人の事笑えないな。

さて、とっとと着替えて食堂に行かねばまた何が起こるか分からん
しな。

よし、着替え終わり。

さあ、食堂にむかうでしょうか。

ガチャ

ああ、見慣れた廊下が何だか懐かしく感じる。

グー

朝からお腹を鳴らすとは我ながら情けない。

散々叫んだからなあ。

よし、速く食堂に向かって朝御飯を食べよう。

おや、向こうからやって来るのは…

あずさ
梓か。

朝起こしてもらって以来だから、数十分ぶりのはずなんだが二週間以上も会っていなかった気がする。

しつこいかな？

「ご主人様！」

「ああ 呼びにきてくれたのか。今、食堂に向かっているとだよ」

「あ、いえ、それが…」

「？」

なんだろう、僕をチラチラと上目遣いで見ながら何かいいたそうにしているが。

「梓？ どうかしたの」

「はい、その…」

珍しいな、こんな梓。押しが強い訳じゃないけど引っ込み思案って事もないし。

「梓？」

「ご主人様、水絵ちゃんと…何かありましたか？」

ああ、アイツか。

何だかドツと力が抜ける。

「いや、色々あったよ。梓が出ていってからもアイツは居座るし」
散々迷惑を掛けられた、と続けようと思ったが、

「それが、水絵ちゃん 食堂に戻ってすぐに泣き出したんです」

は？ 泣く？ 誰が？

「しいなさんや友里ちゃんも慰めていたんですけど、
全然泣き止まなくて…」

アイツが？ 水絵が？

「私、まずご主人様にお知らせしようと思って…」

梓の言葉を最後まで聞かず、食堂に向かって駆け出した。

Bannon

食堂のドアを押し開けると、三対の瞳が僕を捉える。

しいな、友里、そして、蛍。

三人は安堵した顔で僕を見た後、気遣わしげにテーブルに座るもう一人に目を向ける。

そこには…

テーブルに顔を隠し、更に両手で自分の頭を抱えるようにして泣いている水絵がいた。

水絵…

泣いてる…

僕が…

泣かせた…

僕は呆然と立ち尽くしてしまった。

広い食堂には水絵の泣き声だけが響いている。

僕は着替えを済ませ、漸く部屋を出たけれど、僕と彼女達の騒々しい朝はまだ続くようだ…

なにげに再登場（でも出番少ない）のメイドさん（後書き）

後味悪いエンドですが、次回は慰め& a m p, 甘々な話にする予定です。

一週間後には更新…出来てるといいなあ
（別作品の連載が…）

メイドさんは泣き止まない(前書き)

前回予告した甘々までいきませんでした。
猛省しております。

メイドさんは泣き止まない

「み、水絵」

僕の声、震えてたかもしれない。

コイツとも長い付き合いだけど、泣くところなんて初めて見たかも。

「あの、ご主人様」

しいなか。

「水絵ちゃん、食堂に来てから泣き通しで、全然泣き止まなくて」

「うん」

それしか言葉が出てこない。

はは、情けないな、僕。

「ご主人」

友里か。

「水絵はご主人の部屋から食堂に来るまで、一言も話さなかったんだ」

そう、か。

「正直、先程の一件では私にも責任がある。だからなんとか慰めてやりたかったのだが…」

「……………」

「済まない。私では力不足だ」

謝らないでくれ。

これ以上ぼくを格好悪いやつにしないでくれ。

「悪い、みんな二人だけにしてくれるか」

水絵は僕のメイドだ。

彼女が泣くのなら、その涙を止めるのは僕の役目だ。

「かしこまりました。さあ、みんなご主人様にお任せしましょう」

梓に目で謝意を伝える。

梓は、微かに頷き他の三人を連れて食堂を出ていった。

これで、ここには僕と水絵の二人だけだ。

広い食堂に水絵の嗚咽が響く。

ふうー

一度大きく息を吐き、水絵に近付く。

水絵はテーブルに突っ伏し、両腕で頭を抱えた状態なので、その長い髪の毛のせいもあり全く顔が見えない。

「水絵」

ぴくっ

肩が震える。

「そ、そのさっきの事だけどな」

取り敢えず嗚咽は止まったようだ。

「ちょっと強く言い過ぎたよ、ごめんな」

まだ、顔は上げないか。

でも話は聞いている。

一歩前進だな。

「その、お前って喋りやすいからさ、つい強く言っちゃったんだ。反省してる」

リアクション、はまだないな。

「だからさ、お前も落ち着いてさ、顔でも洗って」

「……………んだ」

ん、何か言ったようだけど顔伏せたままだから聞き取れなかったな。

「ごめん、水絵。よく聞こえなかったよ、もう一度言ってくれるか」

水絵は少しだけ体を起こした。

でも、まだ顔はよく見えないな。

「……………らいなんだ」

まだよく聞こえなくて、もう一度聞き返そうかと僕が考えていると、水絵が顔を見せないまま、でもハッキリした声で僕にこう言った。

「おにいちゃんは水絵の事嫌いなんだ！」

おにいちゃん…

ひさしぶりに呼ばれたな。

そっか、お前、そんなにショックだったのか。

ごめん、ごめんな、水絵。

駄目なご主人様で。

僕と水絵の二人の朝は続く。

過去に想いを馳せながら。

メイドさんは泣き止まない（後書き）

次回は過去回想になります。

メイドさんは思い出す（前書き）

うゝむ、ギャルゲーっぽくなってきたなあ。

メイドさんは思い出す

お兄ちゃん、か。懐かしいな。

昔、俺達がまだ子供の頃はそう呼んでくれてたんだよな。

「水絵、お兄ちゃんって、
なんだか懐かしいな。」

「……………」

テーブルに水溜まり、出来てんな。

そんなに泣いてたのか。

「あのさ、」

ガタッ

突然水絵が立ち上がる。

「え、あ」

ダッ

パタパタパタ

そのまま、キッチンへと走り去る。

向こうには出入り口はないはずだから、

「顔でも洗ってくる気か」

ふう

ドサッ

息を吐き、椅子に座り込む。

「何とかなる、のかな」

彼女が、水絵が冷静になってくれればいいのだが。

「おにいちちゃん」

なんとなく呟いてみる。

懐かしい響きだ。

一人っ子の僕には兄と呼ぶ相手も姉と呼ぶ相手もない。

当然、僕の事をおにいちちゃんなどと呼ぶ相手もないはずなのだが、水絵だけは僕の事をそう読んだ。

小さい時、彼女が産まれた時からの付き合いだ。そう呼ぶのも不思議はないような気もする。

（そういえば、蛍はおにいちちゃんとは呼んでくれなかったな。なんだろう）

まあ何時の頃からか、ご主人様と呼ばれていたが。

それも当然と思っていたが、いざ久し振りに呼ばれてみると、なんだか”おにいちゃん”と呼ばれた方がしっくりくる。

不思議なものだ。「三つ子の魂、百まで」というやつだろうか。

そういえば昔、この三つ子というのは同時に産まれた三人の子供（双子の三人バージョンと言った方が判りやすいだろうか？間違った表現だが）の事だと思っていた。

双子や三つ子にはテレパシーが使える、という意味だと思っていた。恥ずかしい思い込みだ。

子供の頃なんてそんな忘れたい思い出でいっぱいだ。

いや、忘れたくはない思い出もいっぱいだが。

僕が何となく追憶に耽っていると、

「あの、ご主人様」

キッチンから水絵が現れた。

顔は洗ってきたんだろう。少し髪の上に水滴が残っている。

目が赤いな。瞼の下が腫れ上がってるような。

彼女は俯いたまま、エプロンの裾を両手で握り締めている。

ど、どうしようか。

正直他のメイドならともかく、水絵にこういう態度を取られるとうしていいか判らない。

こういう時は、まず黙ったままというのは良くない。

彼女は今、不安と羞恥心でいっぱいだろう。

まず何か声を掛けてやらねば。

「「あ、あの」さ」

ぐわ、同時に声を掛けるなんて。

今時三流ラブコメでもやらんぞ。

ま、まずい。水絵はまた下を向いてしまった。

落ち着け、冷静になれ、素数を数えろ。

素数は1と自分自身以外では割り切れない孤独な数字。素数こそが僕を落ち着かせてくれる。

1、2、3…

ってだから1は違う！

よし、突っ込める程には冷静になれた。

さて、問題はここからだ。

この状況でやってはいかん事は中途半端に声を掛けることだ。

それこそ三流ラブコメみたいにまた、同時に声を掛け合って気まずい空気が続く。

それを避けるには…

一気呵成に圧しきってしまう事だ。

例え同時に声を掛けたとしても気にせず自分の言いたい事を言い切ってしまうんだ。

その為にはまず頭の中で言いたい事を整理しておこう。

えーと、まずは

「あの申し訳ありませんでした。ご主人様。皆がこれから食事を摂ろうというときに邪魔をしてしまつて。すぐにテーブルクロスを変えて、朝食の準備を致します。それと、お部屋では大変失礼しました。ご主人様の朝の自由なお時間に割り込むべきではありませんでした。それと、先程はご主人様に対して失礼な呼び掛けをしてしまいました。反省し、以後は謹みますので、お許しください」

彼女は一気呵成にそう言うのと頭を深く下げ、そのままの姿勢で僕の言葉を待つ。

…いや、僕のメイドは優秀だ。

さて、優秀なメイドを持つご主人様はこういう場合どうしたものかな。

彼女は頭を下げたままだし、僕が声を掛けない限りその姿勢のまま
でいるつもりだろう。

気にするなよ。

以後、気を付けろよ。

逆に嬉しかったよ。

お仕置きだ。

いろんな言葉が頭に浮かぶ。

どれも違う気がする。

僕が今この場で彼女に掛ける言葉。

いや、彼女にしてあげられる事。

僕がするべき事。

僕が今とてもやりたい事。

それは…

僕は席から立ち上がり、ゆっくりと水絵へ近付く。

彼女は全く動かない。

彼女の前に立ち、水絵を見る。

顔は見えない。当たり前だ、頭を下げてたまなんだから。

「水絵、顔を上げてくれ」

彼女はゆっくりと顔を上げる。

視線は伏せたままだ。

目は合わせてこない。

ふう

小さく息を吐き、僕は力一杯彼女を抱き寄せた。

「キャッ」

僕の胸の辺りから声が漏れる。

小柄な彼女の身体はスッポリと僕の身体に収まる。

ぐっ

力強く彼女を抱き締める。

今僕がするべきはこれだ。

何の確証もないけど僕はそう思った。

いや、実行していた。

彼女を抱き締めていた。

そうだ、言葉なんていらぬ。

気持ちを伝えるにはこうすればいいんだ。

「う、ご主」

「久しぶりだよな、みい」

「！」

みい。

本当に久しぶりだ。

僕は昔彼女の事をそう呼んでたんだ。

言葉で伝わらないものがある？

自分で言っただけだけど、訂正だ。

言葉じゃ伝えられないものがある。でも、言葉でしか伝えられないものもある。

ぐす

何だ、また泣いてんのか。

頭を軽くポンポンと叩く。

「泣くなよ、みい」

ぐっ

背中の中のシャツが掴まれる。

少し腕を緩めてやる。

腕の中で水絵が、いやみいが僕の顔を見上げてくる。

垂れ目がちな彼女の目尻に涙が浮かぶ。

すがりつくような瞳：

昔からよく泣いてたよな。

「な、泣いてないもん」

そう、こうやって強がるんだ。

この体勢じゃ涙も拭けないくせに。

ちゅう

「はう！」

目尻に溜まった涙を吸ってやる。

耳許でなんて声出してんだよ。

「しょっぱいぞ」

そのまま耳許で囁いてやる。

ぽふっ

「うろうう」

みいが強く顔を押し付けて抱き付いてくる。

僕も抱き締め返す。

不思議だ。こんな時間を持てるなんて。

不思議だ。今までこうしなかった事が。

「おにいちちゃん」

みいが胸の中で呼び掛けてくる。

「なんだ、みい」

僕も優しく返事する。

「覚えてる？」

「覚えてるよ」

何を、とは聞き返さなかった。

僕とみいとの間で”覚えてる”
と言えばアレしかないだろう。

僕たちが未だ小さかった頃。

みいが僕をおにいちゃんと呼んでいた頃。

交わした約束。

忘れる筈が無い。

それは、大切な、とても大切な約束。

僕とみいの静かな朝はまだ続く：

メイドさんは思い出す（後書き）

次回で水絵の話は一旦完結です。
次は誰の話にしようかなあ。

僕とメイドさんの約束 (前書き)

宣言通り水絵の話、一旦完結です。

僕とメイドさんの約束

約束…

それは大事な約束。

僕とみいとの間で交わされた。

忘れられない大切な想い出。

あれは初めて、みいが僕の事を
ご主人様と呼んだ日。

二人の関係が変わった日。

忘れられないあの日。

ああ、何だか思い出すな。

あの日もこうやって抱き合っていたっけ。

……

……

……

「おにいちやあゝん」

「ここだよ、みい」

あの頃の僕らはよく屋敷の中庭で遊んでいた。ここには季節ごとに花を植え替える花壇があり、日の当りもよく僕はしょっちゅうここで日向ぼっこしていた。

みいもこの頃はまだメイドとしての勉強をしておらず、いつも僕の後ろを追いかけて来ていた。

後で聞いたんだけど、この日みいは正式に僕のメイドになるかどうかの意思を確認されていたらしい。

別にメイドにならないからと言って、僕と離ればなれになる訳では無いのだけど、当時の彼女にはメイドという仕事がとても魅力的なものに写っていたらしい。

まあ、メイド服に憧れたという面もあるのだろうけど。

そんなわけで、この時は先に中庭で寝転がっていた僕に後からみいが合流してきたわけだ。

「おにいちゃん、えい」

「わぷ」

これも恒例だが、みいは走ってきたまま僕に飛び掛かるように抱き着いてくる。上半身だけを起こして待っていた僕は、あっさり倒される。後ろは柔らかい芝生だから怪我はなかったけど。

「えへへ、にゃあ〜」

僕のお腹の上から退かないまま、みいは猫みたいな声を出す。

（一度、みいって猫みたいな呼び方になっていたら、こうなった。今では彼女の黒歴史だろうか）

「うゝん、ゴロゴロ」

今度はそのままお腹の上で頬を擦り付け始めた。右頬の次は、左頬と交互に。

（これも今では彼女の黒…しつこいか）

「んにゅう」

髪を撫でてやると、溶けるような顔でふやけた声を出す。

コイツ基本的に垂れ目だから笑うと本当に溶けるような顔になるんだよな。

「ふう」

暖かい陽射しの下、二人抱き合ったまま寝そべっている。

あの頃は毎日こんな感じだった。正直恋なんて呼べるものではなかった。少なくとも僕は。

（みいには内緒だが僕の初恋は別の女の子だ。その話はまた別の機会に）

みいはどうだったんだろうな。女の子の方が早熟だというし。今思うと、みいは伝えたかったのかもしれないな。

「ねえ、おにいちゃん」

「うん？」

そう、この時に。

「おにいちゃんとみいは、ずっと一緒にいられるのかな」

「そりゃ当たり前だろ。少なくともお前がそうしたいならずっと一緒にいられるよ」

今思うと、何だか無責任な発言だ。彼女の気持ちを微塵も考えてない。

今なら分かる。みいは不安だったんだ。人は大人に成る時、不安を感じる。

勿論年齢的にはその時どころか、今だって大人とは言えないけど、彼女からすればメイドになる事を確認され、決意した時、その時こそ大人にならなきゃいけなかった瞬間だったんだろう。

そういやあの時 みいは僕の顔、見てたのかな。

僕の方は空を見てたか、目を閉じてたんじゃないかな。

その後のみいの顔はよく覚えてるんだけどな。

「おにいちゃん！」

「な、なんだ？」

お腹の上で強く叫ばれ、慌ててみいを見た。あの時のみい、ちょっと泣いてたんだよな。

垂れ目の目尻に涙を溜めて。

唇を噛み締めて。

両手でシャツを握りしめて。
僕を真っ直ぐ見てきたんだ。

「お、おにいちちゃん！」

「お、おう」

あの時はあせったなあ。
何を言われるものかと。

「きよ、今日からみいは、じゃない。
私はおにいちちゃんって呼ぶのを止めましゅ」

「いや、噛んでるよ」

我ながらツツコマなくてもいいだろうに。

「ご、ご主人様と呼びます」

「へ？」

「そう決めたんです」

「は？」

我ながらマヌケな返答だ。

「だ、だからご主人しゃまも私の事をみいと呼ぶのを止めてください」

「いや、二つも噛んでるし」

我ながら（以下略）

こういう時はryでいいんだっけ？
よく知らないんだよな。

「ちゃんとみえと呼んでください」

「うん、何でまた」

彼女なりの決意表明だったんだな。今思えば。大人になる為の儀式、
まずは呼び方から。

「私は立派な大人になるって決めたんです。
ご主人様も協力してください」

「また唐突に何を」

今でもそうだがコイツは思い込んだら一直線ってところがあるよな
あ。

「立派な大人になるんです。

それで、それで、

ご主人様とずっと一緒にいるんです！」

「えっ…」

要するに彼女はこう思っただけらしい。

立派な大人とは立派なメイドと同義だろう。

そして立派なメイドになれば、僕とは一緒にいられないと思
い込んだらしい。

別にそんな厳しい基準があるわけでもないんだけどなあ。

「だ、だからご主人様もみ、私の事甘やかさないでください。立派
な大人になれるように協力してください」

「………」

その時の僕は勿論細かい事情は判っていない。

でも、みいが真剣だという事は伝わってきた。

ずっと一緒にいたんだ。

みいの事は一番僕が分かってる。

その時の幼い自分でもそれだけの自信はあった。

だから、お腹の上で（今思うと、とても真面目な話をする体勢では
ないな）じっと僕を見詰めてくるみいに、力強く僕はこう言ったん
だ。

「よし、分かった。今日からお前の事はみえと呼ぶよ。それから立
派な大人になれるように厳しく接していくよ。でもな、それだけじ
ゃだめだぞ」

「え…」

キョトンとした顔を見ると垂れ気味の目が真ん丸になる。これは今
も変わらない。

「お前も僕が立派なご主人様になれるように厳しく接してくれない
と駄目だぞ。二人で頑張っていくんだ」

「あ、は、はい！」

「そうして二人で立派な大人になってずっと一緒にいるんだ。約束だぞ」

「はい、頑張ります。約束です」

そうして二人で笑い合ったんだ。

忘れられないあの日。

忘れられない約束。

忘れられないみみの笑顔。

覚えているさ、勿論。

.....

.....

.....

「僕は立派なご主人様になれたか」

「私は立派なメイドになりましたか」

二人で互いに質問して、同時に答える。

「まだまだだな」

「まだまだですよ」

「お前は敬意という言葉覚えろ」

「最近ツツコミにキレがありません」

「泣き癖を直せ」

「メイドを部屋に連れ込むのも程々に」

「あの日の純粋なお前はどこ行ったんだ」

「それはご主人様のせいですね」

「僕のせいだよ！

後、否定はしないのな！」

思わず彼女を引き離す。

すると、

「いや、流石ですね。

ツツコミのキレが戻ってますよ」

ニヤツと笑って言いやがった。

やられた…

「それでこそ、私のご主人様ですよ」

今度の笑顔はニヤツとではなく、
あの日見た笑顔と同じだった。

僕と水絵との騒々しい朝は終わるけど、
また騒々しい日常は続いて行く。

そう、いつまでも…

「ところで、ご手淫様。
チューはしてくれないんですか」

「お前とは絶対に嫌だ」

僕とメイドさんの約束 (後書き)

何とか一週間振りに更新できました。

今回はまだ決めてないんですけど、しいなか友里のどちらかにしようかと。

メイドさんは提案する (前書き)

今回から最年長メイドの話始めます。

メイドさんは提案する

「ごちそうさま」

なんだか色々あった朝だけど、取り敢えず朝食を食べて食後のコーヒーを飲んだらホッとした。

いや、本当に色々あったな。思い出したくもないような、ちょっとだけ（いや、かなりか）楽しい朝でもあった。

さて、みんなも仕事があるだろうし、僕も部屋に戻るか。

「ご主人さま」

ん？　しいなか。

「ちよつとご相談したい事があるので、後でお部屋に伺ってもよろしいですか」

相談？　珍しいな。しいながそんな事言うなんて。まあ、でも断る理由は無いな。

「ああ、別に構わないよ。何時でもおいでよ」

「ありがとうございます」

しいなは一礼して去っていく。

さて、一旦部屋に戻るか。

「蛍ちゃん、聞きましたか。今度はご主人さま、しいなさんを部屋に連れ込むみたいですよ。ご主人さまのような方を絶倫と…」

あのバカに説教してから。

「全くアイツは」

あのバカは何でああなんだろう。朝、感動的な過去を思い出したばかりだというのに。

「一度真剣に話をつける必要があるな」

頼むから、蜚を汚すのだけはやめてもらいたい。

ただあの二人仲いいんだよなあ。

さっきも顔真っ赤にしながら、話聞いてたもんなあ、蜚。

はあ

梓にでも相談しようかなあ。

でも梓は梓で水絵に甘いしなあ。

まあ、梓の場合は甘いというより何でも受け入れる度量があるって感じだよなあ。

頼りになるのは確かなんだけど、本気で蜚の情操教育というものを考えるべきだと思うんだがなあ。

僕は女の子に幻想を持ち過ぎなんだろうか？

いや、メイドの教育はご主人さまとしての責務ともいえるが。

それをいうならまず水絵を教育しなきゃいかんわなあ。正直見捨て

たいとこだけど、約束しちゃったしなあ。

はあ、本当にあの時のアイツはどこへ行ったんだろ。一体僕はどこで間違えたんだろうな。

コンコン

「あ、入ってきていいよ」

ガチャ

「失礼致します。ご主人さま」

しいなが部屋に入ってくる。

考え事してる間に結構時間経ってたみたいだな。あのバカの事を考えてたら時間がいくらあっても足りやしないよ。だいたいアイツは…

「ご主人さま　よろしいですか」

いかんいかん。

しいながもう来てるっていうのに、考え事してる場合じゃない。ちゃんと話を聞かないとな。

「ああ、ごめんな。で、話って何？　急ぎの用なの」

ちよっと思ひ浮かばないけどな。しいながわざわざ僕に相談なんてな。

「ええ、ご主人さまに確認しておきたいことがあります」

確認？

「というと、一体何の？」

「今夜からメイドたちに伽を申し付けられますか」

……

……

……

……は？

「えっと、しいなさん。何をおっしゃっていられるのでしょうか？」

なぜか、敬語になる僕。

「はい、ご主人さまがメイドたちに伽を申し付けられるのであれば、その準備を進めようと思ひまして」

ニコニコといつも通りの笑顔を浮かべながら、僕に語りかけてくる最年長メイドがそこにいた。

「え」と、一つ確認なんだけど伽というのは」

一筋の望みを託し、質問の意図を確認する僕に、

「夜、ご主人様の寝所に赴き、性処理を行う事ですね」

笑顔のまま、一刀両断に答えを返してくるメイド。

「そうですか」

そうとしか返せなかった。

「所謂夜のご奉仕というやつですね」

言い換えなくてもいい。

えーと、一旦頭を整理しよう。

もしかしたらまたスタンド攻撃を受けたのかもしれない。キングクリムゾンあたりに時を跳ばされたのかもしれないしな。

伽。

夜のご奉仕。

いわゆるS○Xだ。

それをするなら準備する？

僕がメイドと？

そりゃしたいか、といわれればしたいけど。

めがっさ したいけど。

むっさ したいけど。

ぼっけえ　してえけどさ。

それを命令して無理矢理ってのはさあ。さすがになあ。我ながらチキン野郎とは思うけど、やっぱ色々マズイだろ。

第一毎日顔会わせる訳だしさあ、何て言えがいいの？翌朝とか。

別に僕、Mって訳じゃあないけどさ、嫌がる女の子を無理矢理ってのは違うんだよなあ。

「ああ、しいな。なんでそんな事言い出したの」

そう、まずは確認せねば。発言の真意ってやつを。

「蛍ちゃんですよ」

蛍？

「本当はもっと早く伽を勤めるべきかと思ったんですけど、そうないと蛍ちゃんだけ仲間外れになるじゃないですか」

ですので、蛍ちゃんが成長するのを待ってたんですよ」

って、ちよつと待て！

「蛍にもさせる気か！」

「大丈夫ですよ、ご主人様が馴れるまでは蛍ちゃんに伽させる積もりはありませんから」

いやいやいや！

「いや、駄目だろ！そんな事させちゃ！」

「どうしてでしょうか」

ど、どうしてって、

「螢はまだ子供だし、第一僕は嫌がる女の子を無理矢理なんて嫌だよ。いくらご主人様とメイドだからって」

そうだ。彼女達は僕に仕えるメイド。そして僕は彼女達のご主人様だ。僕は彼女達を守る義務がある。一方的に嫌がる事をやらせるそんな暴君にはなりたくない。

「それなら大丈夫ですよ、私達みんなご主人様の事が好きですから」

へ？

「勿論螢ちゃんもですよ」

ほ？

いや、そういう問題では。

いや、そういう問題か。

あれ、でも。

え？

いかん。考えが纏まらん。

心を落ち着けてゆっくり時間を懸けて考えるんだ。

出来れば一週間くらい時間が欲しいな。

さすがにそんな時間はないが。

ムッ！

何だろう？

今、違う世界からツツコミを受けたような…

混乱する頭を抱えながら、僕は最年長メイドと二人自室で驚愕の朝を過ごす。

僕とメイドの騒々しくも（僕一人が騒々しくしてる気がするが）狂乱の朝は始まったばかりだ…

メイドさんは提案する (後書き)

この作品は清く正しく面白いメイド小説を目指しています。

僕とメイドさんは議論する（前書き）

どうも僕が書く主人公は情けない。

僕とメイドさんは議論する

しいなは五人いる僕のメイドの内で最年長だ。（ちなみに唯一僕より年上だ）

背も一番高いし、胸も一番大きい（水絵情報による）

黒く長い髪を頭の上で纏め、おっとりとした性格ながら仕事は正確で早い。

みんなも頼りにしているようで、仕事のことや他の事でも色々と相談しているようだ。

僕も年上のお姉さんという事で頼りにはしていたのだ。

そう、頼りにしていたのだ。

なのに：

「でも、やっぱり必要な事だと思うんですよ」

ご主人様も、もう子供でもないわけですし」

青春の情熱が暴走して誰かを傷付けてもいいけませんし」

だから夜のベッドの中まで面倒見てくれるって。

僕のメイドはみんな暴走癖でもあるのか。

「あゝしいな頼む。頼むから僕の話聞いてくれ」

「はい、かしこまりました」

そう言うのと黙って微笑んだまま、僕の言葉を待つ。

一応話は聞いてくれるんだな。

そこは水絵あのバカとは違うところだな。

さて。

「あゝ取り敢えず座ってくれ。立ち話もなんだしな」

部屋にある椅子を勧め、僕もその対面に腰掛ける。

「では、失礼いたします」

しいなが長いスカートを翻し、椅子に腰掛ける。

（全くの余談だが、うちのメイドたちには決まった制服というものはない。

みんな来てる服はバラバラだし、日によってもデザインの違うメイド服を着てる。

しいなはほぼロングスカートで、水絵はミニスカートが殆どだ。

後の三人は結構色々な長さのスカートだ。

余談を続けるが、僕はメイドのスカートは長くても短くても好きだ。故にメイドたちの服装に関しては注文をつけた事はない。

こだわりのないのか、と叱られそうだが僕はメイドという存在そのものを愛しているので、スカートの長さなんて大した問題だとは思ってない）

「まあ、白いヘッドセットは譲れないが」

「はい、どうかされましたか？」

「いや、すまん。これは関係なかった」

いかん。思考が別世界に行っていた。
これは全く関係ない話だな。

「あゝそれでちょっと落ち着いて話を聞いて欲しいのだけど、
僕としてはみんなにその、よ、夜伽なんて真似はさせたくないんだよ。

別に虫以外だったら良いとかそういう事でもなくて、
粹やしいなにだってそんな事させたくないんだよ。

いや、勿論僕だって男だし、みんなの事をそういう目で見た事がな
いかといったら嘘になるよ」

あゝ緊張する。口の中が渴くな。

と思っていたら、しいながお茶を淹れてくれる。

ニコニコと微笑みながらソツと差し出してくれたお茶はとても美味
しかった。

はあ、いいメイドなんだよな。

まあ、うちのメイドはみんないい娘たちだけだよ。

(あのバカもまあ、いいところはある)

お茶で口を湿らせてから話を続ける。

「うちのメイドたちはみんな可愛いし、いい娘たちばかりだからさ、
みんなの事好きだよ。

でも、いやだからこそ無理矢理関係持つなんて、やっぱり間違えて
るよ。

しいなはさっきみんなも僕に好感持つてるからなんて言ってくれたけど、だからって関係持つてのは話が飛び過ぎだよ」

なんと言うか世の男連中が聞いたら、怒鳴りあげられるだろう。

このヘタレのチキンのリア充が！

俺と替われと！

だがなんと罵られようと譲れないものは譲れない。

彼女達は物じゃない。僕の家族なんだ。

「まあ、そんなわけだよ。しいなの気持ちはありがたく思うけど、あまり過激な提案はしないでくれ」

そう言ってもう一口お茶を口に含む。

ちらとしいなを見ると、彼女も優雅にお茶を飲んでいた。

こうして見るとまるでどこかのお嬢様みたいだな。

さすがに彼女は年上という事もあるのか、僕の前でもあまり堅苦しい態度は取らない。

無論メイドとしての本分は弁えていて、このような特に僕が許した場合に限るけど。

（蚩なんか、まだ僕と二人きりだと緊張するようだ。初々しくて可愛いけど。あのバカは論外。

友里はよく分からない。未だに彼女の性格は掴みきれない。

梓はどうなんだろう？友里とはまた違った意味で彼女もよく分からない。

まあ、彼女たちの話はまた後日）

「ご主人様々よろしいですか」

彼女がお茶のカップを置いて話かけてくる。

まあ、このまま終わるとは思ってなかったが。

「ああ。どうぞ」

さて、どんな反論をしてくる？

「では～ご主人様は夜は自分で慰めてらっしゃるんですか～」

ド直球で来た！！！！

うーむ。さすが年上と云うべきか。ここまでド直球で来られるとは。却って清々しいぜ。（ごめん、嘘）

「えーと答えなきゃいけないか？
というかそれって関係あるのか」

まあ、あるっちゃあ、あるが。

「はい～ご主人様の健康管理もメイドの大事な仕事ですから～」

あくまでニコニコと微笑みながら聞いてくる最年長メイド（そして胸も一番。しつこいか）がそこにはいた。

しかし云うに事欠いて健康管理ときたか。

確かに正常な男子ならそういう事をする方が当たり前だが。
勿論僕は正常な男子だ。

故に毎日、昼でも夜でも…げふんげふん。

まあその、自分が正常である事は確認できてる。（形がどうか、大きさがどうかはよく知らないが多分正常の範囲内だろう）

「女の子が聞く事じゃないよ」

そう逃げる僕に、

「メイドのお仕事です」

追い込むメイドさん。

「僕はメイドにそこまでは求めない」

更に逃げる僕に、

「メイドは時に主の意に添わぬ事でも、為すべき事は為さなくてはならない。そう先輩から教えました」

更に追い込むメイドさん。

「さすがに恥ずかしいよ。勘弁してよ」

弱気な僕に、

「だめですよ男の子でしょう」

強気なメイドさん。

いや、男だから恥ずかしいんだよ。

「もう、ご主人様は困ったご主人様ですね」

僕のセリフだよ。

今思うと、あのバカはまだマシだった。

（こんな事を思う日が来るなんて。

こんな事を思う日が来るなんて！

大事な事なんで二回言ってみた）

アイツとはノーガードの殴りあいって感じだけど、しいなとはこっちのパンチが全部避けられてる感じた。
向こうは殴るというより、追い詰めて来るって感じた。手も出さずに。

「仕方ありませんね」

そういうと、しいなは立ち上がって此方にやって来た。

「ご主人様、ちょっと立っていただけますか」

嫌な予感しかなかったが、素直に立ち上がった。

反論しても無駄だろうから。

立って向かい合っていると、彼女とぼくの目線の高さはほぼ一緒だったりする。

もうちょっと身長欲しかったなあ

などと益体もない事を考えていると、

「ご主人様へ失礼しますね」

そう言って、ふわりと僕を抱き締めた。

…………え。

ぎゅっ

それほど強く抱き締めている訳じゃないけど、でもしっかりと彼女は僕を抱き締めてきた。

両手は脇を通して背中に。

顔は僕の左肩の上に。

そして。

そして。

（胸が！胸があああああ！）

当たってた。

というか押し潰されてた。

正直。

物凄く気持ち良かった。

今日は何故だか二人のメイドを抱き締めただけど、二人にはこの感触はなかった。

二人とも標準より小さい（だろうし）

しかし、しいなは世の女性の平均を大きく上回るサイズだ。
今正に実感しているわけだが、正直（我ながらしつこいな）

これはスゴイ！

これは良いものだ！

俺の幸せはここに在ったんだ！

いかん。軽く違う世界に行きかけた。

理性を取り戻さねば。

「ご主人様」

み、耳許でしゃべるな！

あと、なんか言い方がいつもと違うぞ。

なんか柔らかいっていうか、色っぽいっていうか…

ず、ずるいぞ。

「本当にいりませんか？私の事」

だ、だから耳は勘弁してくれ！

む、胸を押し付けないで！

何で髪の毛いい匂いするんだああ！

自分の部屋で最年長メイドさんに抱き付かれながら、僕の騒々しい
(五月蠅いのは僕だけだが) 時間は止まらない…

僕とメイドさんは議論する（後書き）

次回で最年長メイドさんの話は完結するかもです。（予定は未定）

僕はメイドさんに気付かされる（前書き）

何故こうなる

僕はメイドさんに気付かされる

ド　ド　ド　ド　ド

し、心臓の音って、こんなはっきり聞こえるものなのか。

僕はしいなに抱き締められたまま（我ながら情けないな）心臓の鼓動を感じていた。

まるで耳のすぐ側に心臓があるみたいだ。

いや、すぐ側にはしいなの頬が…って、僕の馬鹿！

自分から緊張する方向に持っていてどうすんだよ！

こういう時は、まずそう落ち着くんだ。

考えてみれば、今日は朝からこんな事の連続じゃないか。

そう、僕は出来る…

むにゅっ

ごめんなさい！無理です！

や、柔らかい。

なんでそんな柔らかいんだよ…

う　う　う

男って悲しい。

……あ

ピロリン♪

ははは

女の子は柔らかいけど、男は固くなるよね。

えーと、気付かれない内に何とか…

「…ご主人様。当たってますよ」

はい。即効でバレてます。

どうもありがとうございました。

まあ、そりゃバレるよなあ。

こんだけ密着してれば。

…明日からGパンにしようかな。

さわっ

「！」

で、電流が走ったかと思った。

しいなの指先が僕の襟足からうなじを撫でていったんだけど、ゾク

ッとした。

「ご主人様。首筋、弱いんですか」

いや、僕も知りませんでした。

あと、その体勢で喋られると息が首筋に掛かって、ゾワツとするんですけど。

「ご主人様…良いんですよ」

何が良いんですか！

いや、分かってますけども！

分かってはいますけれどもね。

ど、ど、どげんしょう。

こんな時、昔の漫画じゃあ悪魔と天使が現れて、最終的には悪魔と天使が手を組んでけしかけるっていうパターンを見かけたけれども。

あれって結構ずるいよなあ。

要するに自分以外の何かに背中を押してもらったっていう言い訳づくりにも見えるよ。

最終的な決断と責任は自分で負わないとな。

よし。

「し、しいな。一旦離れて」

「……………」

ぎゅ

いや！力を込めないで！

「ちゃ、ちゃんと話がしたいからさ。
この体勢じゃ話が出来ないよ」

「話なんていりません」

いやいやいや、会話は重要だよ。

人と動物の違いって、やっぱり会話が出来るかどうかだよ。

確かに意思疎通するだけなら、他の動物でも出来るんだろうけどさ。

イルカとかスゴいっていうじゃん。

なんかもう、テレパシーとか使っちゃうんでしょ。

テレパシーなんて羨ましいよな。

他人の心が分かるっていうのも怖い気もするけどさ。

でも、やっぱりあったらいいな、と思うんだよ。

そう、例えば、

ぎゅう

むにゅむにゅ

すりすり

きゃあーーーーー!!

より一層抱き締めないで。

つぶれてる、つぶれてる。

首筋に柔らかい頬の感触がぁー!。

神様お願い!

今すぐ僕にテレパシーをプリーズ!

もう彼女が何を考えているのか、

さっぱり分かりません!

「ご主人様、分かります?」

いえ、ですから全く分かりません!

「蛍ちゃんや水絵ちゃんを抱き締めた時もドキドキしました?」

へ?

いや、まあ、それなりには…

でも、今そんな事、

「二人だっただキドキしてたはずなんですよ、今の私みたいに」

ほ?

さっきからだキドキさせられっ放しなのは僕のほうだと思っただけ
ど。

「私達、もう子供じゃないんです。」

蛍ちゃんだって、水絵ちゃんだって、ご主人様が思ってるよりずっと大人なんですよ」

……しいな？

「私の行動は行き過ぎだったかもしれませんが。先走りし過ぎたのかもしれませんが。」

でも、いつまでもこのままという訳にはいかないですよ」

なんか…

首筋が冷たいんだけど…

「みんな大人になるんです。心も身体も。」

ううん。今だってもう子供じゃないんですよ。

大人じゃないっていうだけで、子供でもないんです」

あの、まさか…

「二人だけじゃないです。」

友里ちゃんや梓ちゃんの事はどう考えてらっしゃいます？
年齢が上って事は、それだけ問題も大きいって事ですよ」

顔が見えないけど、声は聞こえる。

嗚咽が、混じってる、よな。

「ご主人様はみんなの事を考えてあげなくちゃいけないですよ。
みんなの気持ちを受け止めてあげなくちゃいけないんです。
分かってますか？」

本当に分かってますか？」

……泣いてんのか。

「ご主人様は、考えているっていうつもりかもしれませんが、それはただ単に問題を先送りしてるだけじゃありませんか？
本当に考えましたか？

真剣に考えてくれましたか？

私達の事。

ご主人様と私達の事。

大事な事なんですよ。

もっと真剣になってください！

あなたが。

あなただけが私達のご主人様なんですから！」

……言葉が出なかった。

彼女は、しいなは僕の首許に顔を押し付け、泣いている。

首から背中へと彼女の涙が伝い、落ちる。

彼女の右手は僕のシャツの襟元を強く掴み、左手は背中部分を引きちぎらんばかりの力でしがみついている。

耳には彼女の嗚咽が響く。

今はもう泣く事しか出来ないのか、彼女はそれ以上何かを言おうとはしなかった。

”いつまでも子供ではいられない”

彼女の口から出た言葉が頭の中で響きわたる。

僕は間違っていたのか。

僕はただ守りたかっただけなんだ。

みんなを。

僕の大切なメイドたちを。

でも、しいなは、傷付いた。

あのまま抱けば良かったのか？

しいなを。

みんなを。

それで？

その後は？

愛し続ければ良かった？

メイドとして？

女として？

僕にはそれが許される。

誰からも咎められる事はない。

当たり前だ。

彼女達は僕のメイドなんだから。

一生涯僕に仕えるメイドなんだから。

メイドだから？

だから？

何をしてもいい？

愛してもいい？

愛さなくてもいい？

抱いてもいい？

抱かなくてもいい？

彼女達が望んでも？

いや、彼女達には拒む事は許されない。

それがメイドの努め。

主人に身も心も捧ぐ事。

それが正しいメイドの姿。

じゃあ。

じゃあ主人は？

正しい主人って…

どうすりゃいいんだ？

どうすりゃなれるんだ？

泣いてるのに。

大切なメイドが泣いてるのに。

大切なメイドが泣いてるのに、何も出来ない僕はどうすりゃいいんだ？

どうすりゃ正しい主人になれるんだ？

どうすりゃ正しい主人になって、彼女の涙を止めてやれるんだ？

分からないよ。

わかんねえよ。

ワカンネエヨ

本当にいるんだったら教えてくれよ、神様。

頼むよ！

泣いてなんて欲しくないんだよ。

笑って欲しいんだよ。

彼女には…

しいなには…

泣き顔より笑顔が似合うやつなんだよ。

頼むよ…

頼むよ…神様…

………神様なんて居やしなかった。

結局彼女は泣き止まぬまま部屋を出ていった。

僕に泣き顔を見せぬまま。

僕に気を遣ったか。

或いは羞恥からか。

顔を伏せたまま部屋を出ていった彼女の表情は確認出来なかった。

僕は何も出来なかった。

ただ立ち尽くしてただけだ。

最初から最後まで、ずっと。

彼女に言葉を掛けてやる事も出来なかった。

あまりに大人な彼女に対し、あまりに子供な僕は何も出来なかった。

部屋には沈黙が横たわる。

彼女と僕の騒々しい時間は終わりを向かえ、部屋には時計の時を刻む音だけが染み渡る。

彼女と僕の時間は、再び始まるのか。

その時の僕には分からなかった。

僕はメイドさんに気付かされる（後書き）

終わりませんでした。次で終わるかも分かりません。

メイドさんは薔薇を育てる (前書き)

お久しぶりです。

恥ずかしながら戻って参りました。

メイドさんは薔薇を育てる

昼食を終え、部屋に戻った僕は一人彼女の事を考え続けていた。

昼食時には当然彼女も食堂に現れて給仕をしてくれた。

いつも通りにふるまってくれた事があった。

寂しさも感じないではなかったが、やはり安堵の気持ちが大きかった。

さすがに彼女は大人だな。

他のみんなも特に気付きはしなかっただろう。

そういう意味では一安心だ。

ただ…

彼女が言った事は正に僕の急所を貫いた。

”いつまでも子供じゃられない”

そう。人は誰しも皆大人に成っていく。

成らなくてはいけないんだ。

でも、僕は現在いまが続く事を願ってしまった。

彼女達と僕とだけで暮らすこの生活がいつまでも続く事を。

いや、続けるだけだったら問題はないんだ。

僕は彼女達のご主人様で、彼女達は僕のメイド。

この関係が続いていく事には、何の疑問も問題もない。

じゃあ、その先は？

彼女達を一生メイドとしての立場に置いておくのか？

例えば、妻とか、もしくは愛妾か。

実際そういう例はある。

うちの一族の歴史を振り返ってもメイドを妻や愛妾にしてるのは珍しいことじゃない。

実際僕の母親は元メイドだしな。

今頃は：ロンドンか？

いや、シドニーだったかな。

まあ、何処かで元気にやってるんだろう。

うちの両親の事は心配いらない。

どうせ、向こうも心配なんてしてないだろう。

ふう

しいながあんな事を言い出したのも、当然そういう事が背景にあるわけだよな。

特に彼女はうちの母親に可愛がられてたしな。

その辺の馴れ初めなんかも散々聞かされたのかもな。

あの人、息子にも平気でおのろけ言うからなあ。

何が悲しくて両親の恋物語なんか聞かなきゃいけないんだよ。

しかもやたらドラマチックに話したがるからなあ。

あの人のお話を全部信じたら、うちの両親は駆け落ち何回したことになるんだ？

四回や五回じゃ済まないぞ。

全くあの色ボケ夫婦は：

いや、そんな事は今はどうだっていい。

大事なのは僕と彼女達の事だ。

正直何をどうすればいいのか分からない。

我ながら情けない話だが、本当にどうしたものだろう。

何も思い浮かばない時はどうするか？

人によって、状況によっても違うだろうが僕の場合はこうする。

直接悩みの対象にぶつかっていくんだ。



「しいな、ちょっといいか」

彼女に声を掛け庭にあるバラ園まで連れ出す。

何でも僕のじいさんは晩年やたらとバラに興味を持ち出したらしい。事業から引退して暇が出来たせいか、うちの庭には見事なバラ園が

出来上がった。

じいさんが死んだ後は何故かしいなが後を継いで世話していたらしい。

さすがにじいさんが生きてた頃ほどは手間を掛けられるわけではない。

メイドとしての仕事もあるからな。

ただ今でもうちの庭にはバラが咲き誇っている。

僕の後ろに付き従うメイドの努力の成果として。

「いつ来てもすごいな、ここは」

「ありがとうございます、ご主人様」

バラの花弁にそっと触れながら話を始める。

視線はバラに落としたまま、僕の背中で僕の言葉を待っているであろう、彼女に向けて。

「ずっと考えていたよ、君に言われた事」

「……………」

何も言わなくてもいい。

ただ聞いててほしい。

そこにいてほしい。

「何時までも子供のままじゃられない。

心だって身体だって成長していく。

そう、その通りなんだよ。

君が言った事は本当に正しい」

「……ご主人様」

その場にしゃがみ込み薔薇の花弁に顔を近付ける。
昔はこの匂いが苦手で、よくじいさんに怒鳴られた。
花を愛せないような奴に人を愛せるか、と。
随分好き勝手な事を言いやがる。
花の匂いなんて人の好みだろう。
そう思っていたものだけどな。

「僕はみんなの事が好きだよ。
ずっと一緒にいたいと思ってる。
でも、それは所詮子供の我儘なんだよな。
僕には責任がある。」

みんなの主人としてのな。
主人としてみんなの幸せを考える責任がある。
もしずっと自分のそばに置くのであれば、
幸せにしてやらないといけない。
この主人と共に生きて来て良かった、
そう思えるようにしないといけないんだ。
ノブレス オブリージュ、だっけ。
しいなが教えてくれたんだよな。
責任ある立場にあるものにはそれ相応の義務が発生する。
本当にごめんな、駄目な主人で。
ずっと教えてくれてたのにな。
ずっとそばにいてくれてたのに…
ずっと見守ってくれていたのに…」

「ご主人様は悪くありません。
悪いのは私です。」

私が至らぬばかりに。

私が自分の気持ちを押し付けてしまったから
ご主人様が苦しまれているんです。

私がいけなかったんです。

私が…

わた、しが…」

背中から聞こえるしいなの声に嗚咽が混じる。

僕はただ黙ってそれを聞いていた。

結局こうなるのか…

情けない…

自分が本当に情けない…

泣いてなんて欲しくないって。

笑っていて欲しいって。

ただただそれだけを願っていたはずなのに。

畜生…

何で、俺はこんなに…

「はあ~~~~い♪

帰ってきたわよ~~~~ん」

…シリアスな空気をぶち壊す声が薔薇園に響きわたる。

どうやら僕の日常にはやはり騒々しさが付きまとうらしい。

とても懐かしくは感じられない

僕をこの世に産み出した女性の声を聞きながらそう思った。

……いや、どうなるんだ？

本当にね。

メイドさんは薔薇を育てる (後書き)

スペシャルゲスト(?) 登場です。

元とはいえ、メイドです。

キャラ設定曖昧です。

次回更新は未定です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1336q/>

僕とメイドの騒々しい日常

2011年5月11日14時56分発行